

手

を痛めてしまい、しばらく仕事を休むことになった。このところ少し立て込んではいしたが、どの程度で痛むかやってみないとわからないので、今後の参考になった。草取りといえども侮れない。

時間がぼかりと空いたので、気になっていた島根県立美術館の森山大道「光の記憶」を見に行くことにした。バスで行った。バスを選んだのにはいくつか理由がある。これまで交通手段としてバスを習慣化させたことは一度もなく、市内を移動するなら自動車か自転車、徒歩以外を思うことはまずなかった。でも、そう遠からずバスに頼る生活になるのだから、今のうちから慣れておこうとは考えていた。公共交通機関を利用した方が社会にとっては微差とはいえよりましなのだ。一畑百貨店の閉店も実行を急ぐ気にさせた。公共をないがしろにすると結局は己に返ってくる。大切な場なり技術なり、買っても利用もせずにおいて、絶えるを惜しむなど身勝手過ぎるというものだ。もう一つ、バスなら飲酒を咎められる心配がないというの大きい。

松江は東西に流れる大橋川を挟んで南北に開けている。バスは、南半分、北半分をそれぞれ循環して松江駅で交差するルートを中心にくつもの路線が縦横に走っている。時計回りの循環を外回り、反時計回りを

内回りと称し、これらを組み合わせれば、市内どこへでも行けるようになっていた。無関心とは恐ろしい。こんなこと自分が利用する気になって初めて知った。家から最寄りのバス停で乗り、寺町で乗り換えるのだと脳内で繰り返し、それでも確認しておこうと降車の際に運転手に聞いてみると、

「んー、乗り換えねえ。美術館ならここから歩いて十分とかかりませんよお。」

はあー、おらを誰だと思っちゃーや。生粋の松江市民だ。そぎゃんこと言われんでもわかっちゃーわ。と思つたものの、言われてようやく思い込みに気づいた。運転手には旅行客だと思つてもらおう。

森山大道の写真は、これまでも何度か見る機会があったのだが、まとまった数を見るとまた違ったことを思つた。ふさわしい被写体、光、構図、そのためのセオリー、そんなことを思つた途端に撮れなくなるような写真を次々見ていると、お前はなぜそこでシャッターを切るのだ、と逆に問われているような気がしてきた。そこにどれほどお前自身がいるのか。「写真とは何か」を狂わんばかりに探り続けた写真家の剛力に圧倒された。帰りのバスの中で、さつき見た写真がいくつも浮かんできた。反芻するには、バスの車中つてのはなかなかいいなと思つた。

空き家 12
木幡智恵美

生家④

生家の隣保も空き家だらけだ。東隣が空き家、溝を挟んだ右隣も空き家。道路を隔てた向かいも空き家。

私が住んでいた頃、隣保は十軒だった。高校三年生だった時に祖母が亡くなり、その五年後に父が、さらに七年後に母が亡くなり、その度に隣保が集まって葬儀を仕切ってくれた。各家から男女二人が手伝いに出、男性たちはお坊さんへの連絡から役所への届、香典返しの手配から受付、香典のまとめ、墓堀さんの手配など諸々のことを手分けしてやる。女性たちは買い出しから煮炊きの一切、裏方の諸々をやるのだ。台所の裏に青いシートを屋根からかけ、農協から借りて来た大きなコンロに大なべを乗せて煮物や汁を作っていた。祖母が一月、父が三月、母が十二月と、いずれも寒い時季で、殊に母の葬儀の際は三十センチくらいの積雪があつたので、皆さんに申し訳なくて仕方がなかつた。祖母や父の時は、私に直接交渉などなかつたが、母の時は私しかいないので、淨めに使う洗面器や脱脂綿の在り処を聞かれ、こんなことまで隣保がするのかと驚いた。今こそ葬儀屋がすべて執り行ってくれるが、当時は皆隣保がやっていたのだ。

葬儀の際に使う食器やお膳なども隣保で保有していて、持ち回りで保管していたが、うちの庭の工場が使われなくなつてからはそこに収めていた。食事は、出棺や葬儀などの時刻に応じてではあるが、出棺して焼き場に行く前や後(祖母の時はまだ土葬で、墓に埋葬に行つて帰る際、用意されていた草鞋を途中で脱ぎ、素足で帰る。帰ると、縁に湯をはつたらいが用意されていて、そこで足を洗い、やはり用意されていたタオルで拭いて上がった)、葬儀が終わつた後など、幾度か膳が用意された。その度に、料理の盛り付け、運んだり片付けたり洗つたりと、女性たちは大変だった。ご飯に豆腐汁、五種の煮物、漬物など、膳を出す度に盛り付けたり、不足分を作つたりするのだから。そして、葬儀が終わり、すべての片づけも終了し、香典と香典帳が喪主に手渡されると、遺族側が隣保の人たちにはあらかじめ用意されていた膳を出し、お礼として振舞うのだ。

30代フリーター 柄谷行人は『力と交換様式』を次のように結んでいる。

「そこで私は、最後に、一言いつておきたい。今後に、戦争と恐慌、つまり、BとCが必然的にもたらず危機が幾度も生じるだろう。しかし、それゆえにこそ、『Aの高次元での回復』としてのDが必ず到来する、と」

年金生活者 戦争と恐慌が交換様式Dの到来を必然化すると言っている。Dとは理想社会の土台として想定された交換様式だ。柄谷は交換様式をAⅡ互酬（贈与と返礼）、BⅡ服従と保護（略取と再分配）、CⅡ商品交換（貨幣と商品）、DⅡAの高次元での回復の4類型に分け、これまでの歴史はA、B、Cの順に支配的な交換様式が移り変わってきたと考える。そして、まだ支配的な交換様式になったことのないDは未来において支配的となると予言する。

その根拠としてあげたのが戦争と恐慌だ。つまり、いちばん起きてほしくない悲劇こそが理想の状態を招き寄せると

戦争も恐慌もそれを妨げる。社会がDに近づくには、平和ボケ、繁栄ボケが世界中に蔓延するほど富の稀少性が縮減することが必要だ。

30代 柄谷は交換様式Dは「向こうから来る」とも言っている。「Dは、Aとは違って、人が願望し、あるいは企画することによって実現されるようなものではない」と（『力と交換様式』）

年金 もしDが来るとしたら「向こうから」でしかないことは確かだろう。浄土は「願望」や「企画」といった「自力」によってではなく、阿弥陀如来の「他力」によってのみ到達できるように。

ただし、それはDの到来が確実であることを意味しない。Dは理想社会の土台をなす交換様式として想定されているが、理想は目指されるべきもの、実現を願望されるものではあっても、必ず実現すると証明されたものではない。柄谷が「必ず到来する」と言っているのはだから、予言に過ぎない。

言っている。この考えを延長すれば、悲劇が過酷であればあるほど、Dの到来の可能性が高まるということになる。

ならないような歴史段階はすでに過ぎたからだ。

30代 それならDは到来しないほうがいいじゃないか。

年金 世界の戦争の「本流」は第2次世界大戦を最後に、破壊力を競い合う流血の戦争から抑止力を競う無血の戦争に移った。東西冷戦はその最初の大規模な戦争だった。ロシアとウクライナの流血の戦争はそうした「本流」の変化の反証のように見えるかもしれない。しかし、この戦争に「参戦」した西側諸国は依然として無血の戦争を続けている。それはいま以上の悲劇の過酷化にブレーキをかけていると考えることができる。

柄谷がDを必然化するもうひとつの根拠としてあげる恐慌は、過酷化どころか、起きること自体が可能性の薄いものになっている。資本主義の高度化が富の稀少性の縮減を加速し、先進諸国や新興国で国民の大多数が飢えや寒さにさらされる事態を心配しなければ

柄谷は『力と交換様式』でレーニンを批判しながら、それを忘れたかのようになり、第1次世界大戦を背景に起きたロシア革命を理想社会の到来の経路のモデルにしているように見える。

30代 そうだとすれば、Dは到来しないということになる。

年金 到来するかしないかはわからない。ただ、もし到来するとすれば、戦争と恐慌ではなく、平和と豊かさの拡大が必須の条件となることは確かだろう。

DがAの高次元での回復だとすれば、Aを支配的な交換様式にすることを可能にしていた生産力、すなわち狩猟採集による生産力もまた高次元で回復されなければならぬ。狩猟採集は自然に大きく手を加えなくても自然の恵みが得られるところに特徴がある。それは富の稀少性をゼロに近い状態に保ち得る生産力を意味する。その高次元での回復を可能にするのは資本主義のさらなる高度化以外に考えられない。

かといって、Dは到来しないと証明することもできない。だから、どうしてもその経路や姿を考えることを私たちは強いられる。

未来を予測することによる利得は、それが現実になったとき、あわてないで済むことだ。たとえば、資本主義は終わらせようと意図して終わらせること

ができるものではなく、それが終わるときがあるとするれば、いわばおのずと終わる。そのとき私たちは未知を目の当たりにし、未経験を経験するだろう。そのとき、うろたえたり、たじろいだりしないで対処するには、資本主義の向こう、その彼岸を考えておく必要がある。

30代 アメリカに「アーミッシュ」というキリスト教徒の共同体があつて、彼らは電気もクルマも使わず、馬車に乗る。柄谷はそれがDのモデルになり得るようなこと示唆している（『柄谷行人『力と交換様式』を読む』）

年金 そんな生活を社会の多数が受け入れることはあり得ない。柄谷自身「世界中に『クルマも電気もダメ』と強制したら、それはむしろ恐ろしい国家になります」と言っている（同）。

交換様式Dが到来するとすれば、欲望を人為的に抑える「アーミッシュ」とは逆に、際限のない人間の欲望を常に上回る富の供給を可能にする生産力の飛躍的な発展が必須の条件となる。

ニュース日記 882
中村 礼治

向こうから来るもの